

ドゥーゼ



鄧小平

共同通信

鄧小平が中華人民共和國成立後の中国共産党で最初に重要な役割を演じたのは、一九五四と五五年に東北を「独草軍団」化したという「高崗・饒漱石反党連盟」摘発においてであり、その功績もあって五五年に党中央政治局委員に選出された。やがて五六年のソ連共産党第二〇回大会に出席して「スターリン批判」の洗礼を受け、

同年の中国共産党八全大会に際しては党規約のなかから「毛沢東思想」という表現を削り取ってしまった。一九六五年に始った文化大革命は、やがて劉少奇、鄧小平ら党内実権派を打倒する尊権闘争へと発展し、鄧小平は「裏切り者・反革命分子」の烙印を押されて失脚した。しかし林彪異変にみられた文革挫折後の七三年四月、再び國務院副総理として復活した。ところが七六年一月の周恩来死後、毛沢東側近(いわゆる「四人組」)による走資派批判のキャンペーンが始り、このことによりだつた中国民衆の叛乱「天安門事件」ではその全責任を負つてきびしく糾弾され、再び失脚した。しかるに同年九月の毛沢東の死、同十月の北京政変による「四人組」逮捕を経て、翌七七年七月に再復活した鄧小平は、七八年十二月の中国共産党第一期三中全会で文革派華国鋒らを制してついに多数派となつた。やがて八一年六月の中国共産党第一期六中全会では、華国鋒を党主席の座から引きずり降ろして腹心の胡耀邦を党主席に選任することに成功した。八二年九月の中国共産党十二全大会では党中央顧問委员会主任兼党中央軍事委員会主席となり、また国家軍事委員会主席も兼ねている。

鄧小平

Teng Hsiang-ping 一九〇四

現代中国の最高指導者。変転きわまらない現代中国の政治史にもまれな政治的生命力と組織力を有する鄧小平は、漢民族のなかでも不撓の反抗心をそなえた特殊な種族、客家の出身として一九〇四年に四川省広安県に生れた。生家は豪農であつたが、二一と二四年に「勤工儉学」留学生として渡仏し、現地で中国社会主義青年団に参加した。二四年中国共産党に入党し、フランスからの帰途、数ヶ月間モスクワの孫逸仙大学に学び、二六年に帰国した。二七年の国共分裂後は上海と広西省で紅軍の政治工作に従事し、長征にも参加した。抗日戦争では劉伯承、徐向前らの一二九師団の政治主任として活躍、第二次世界大戦後の国共内戦では第二野戦軍の政治委員として四八年の淮海戦役を勝利に導き、中国革命の達成に貢献した。

西帝大洋およびインド洋とこれらの大洋における島々の一部の軍事的、政治的および経済的支配の獲得を目的とする共同謀議の罪、中・米・英・蘭・仏に対する侵略戦争の罪、俘虜および一般人収容者虐待の罪等によって絞首刑の判決を受け、同年十二月二十三日に刑死した。(林茂)

現在、鄧小平は、非毛沢東化のための「整党」に着手する一方で、「四つの現代化」のための国内経済活性化政策と対外「開放」政策を指導している。しかし中国内部からの批判も根強いだに、鄧小平としては、彼が好んで用いている格言「機失うべからず、時再び来らず(機不可失時不再来)」を人生訓として、政治戦略の達成のために余生を賭けていかざるをえないであろう。「中国」「中国共産党」「中国史」「文化大革命」

B. Paris, H. Chang

(中嶋 瑞雄)



ドゥーゼ

早稲田大学演劇博物館提供

一八九四年に彼女は若い詩人ガブリエレ・ダスツィオと恋におち、そのめぐりあいのなからダスツィオの『死の都』、『ジョコンダ』(ともに一八九八)、『フランチェスカ・ダ・リミニ』(一九〇二)などの作品が生れ、ドゥーゼの舞台によって成功した。ダスツィオの小説『炎』(一九〇〇)は二人の愛を描いたものである。ドゥーゼはまたヘンリク・イブセンを好み、人形の

かつて毛沢東時代に「鼠を捕る猫なら白でも黒でも同じだ」という「白猫・黒猫論」を唱えて激しく非難された鄧小平は、彼一流の「現実主義」を保持している。そのような鄧小平の政治戦略は、中国社会の全面的な非毛沢東化であり、毛沢東神話を否定し、「閉ざされた中国」を「開かれた中国」へと移行させるためのプログラムの実現にほかならない。一九七〇年代末の「工業二十条」や「工業三十条」に示された国内建設のアイデアは、鄧小平がひそかに準備したものであつたが、いまや「四つ(工業・農業・国防・科学技術)の現代化」の綱領として、中国社会を大きく変化させるためのプログラムになっている。

ドゥーゼ

Eleonora Duse エレオノラ・ドゥーゼ 一八五九

一九二四 イタリアの女優。一八五九年十月三日、ピジエバーノで生れた。祖父ルイジはカルロ・ゴルドーニの作品を得意とした俳優で、父アレックスサンドロも地方回りの劇団の人気俳優であつた。四歳のとき、レ・ミゼラブルのコレット役に初舞台を踏み、十四歳でジュリエットを演じ、その才能を認められた。父の一座の解散後、劇団を転々として苦勞を重ねたが、七九年にエミール・ゾラの『テレーズ・ラカン』を主演、女性の苦悩を描いた道義的演技を激賞され、その後エルネスト・ロッシの劇団に主演女優として招かれ、イタリア各地の舞台上に立った。八二年ドゥーゼはフランスの名女優サラ・ベルナールの舞台を見て刺激され、小デュマらのフランスの新しい戯曲を演じはじめた。八七年ロッシ一座の解散後、ドゥーゼは自分の劇団を結成、オーストリア、ドイツ、イギリス、フランスなどのヨーロッパ諸国やアメリカ、ロシア、エジプトなどを巡業、その演技はアントン・チェーホフやコンスタンチン・スタニスラフスキー、バーナード・ショーからも高く評価された。

同年の中国共産党八全大会に際しては党規約のなかから「毛沢東思想」という表現を削り取ってしまった。一九六五年に始った文化大革命は、やがて劉少奇、鄧小平ら党内実権派を打倒する尊権闘争へと発展し、鄧小平は「裏切り者・反革命分子」の烙印を押されて失脚した。しかし林彪異変にみられた文革挫折後の七三年四月、再び國務院副総理として復活した。ところが七六年一月の周恩来死後、毛沢東側近(いわゆる「四人組」)による走資派批判のキャンペーンが始り、このことによりだつた中国民衆の叛乱「天安門事件」ではその全責任を負つてきびしく糾弾され、再び失脚した。しかるに同年九月の毛沢東の死、同十月の北京政変による「四人組」逮捕を経て、翌七七年七月に再復活した鄧小平は、七八年十二月の中国共産党第一期三中全会で文革派華国鋒らを制してついに多数派となつた。やがて八一年六月の中国共産党第一期六中全会では、華国鋒を党主席の座から引きずり降ろして腹心の胡耀邦を党主席に選任することに成功した。八二年九月の中国共産党十二全大会では党中央顧問委员会主任兼党中央軍事委員会主席となり、また国家軍事委員会主席も兼ねている。